

Book Review

評者：田中久仁子 聖マリアンナ医科大学看護専門学校教務課長補佐

看護現場で「教える」人のための本 教える側と教わる側のミスマッチを防ぐために

著：新保幸洋／発行：医学書院
定価：2420円（本体2200円＋税10%）



実習指導者・教員ともに指導の困りごとを解決できる1冊

本書は、病院内で教育や指導を行っている臨地実習指導者、プリセプター、新人教育担当などの指導者向けに書かれた本である。事例のなかに出てくる先輩看護師と新人看護師の会話のやりとりをうなずきながら読み進めた。

本書の二部構成のうち、第1部は事例編である。教える側と教わる側の会話形式で13のケースが示され、「自分にもこういう場面があったな（あるな）」と思い浮かぶ。その場面で、どう指導していったらよいのか、第2部の解説編で示される。ここでは基本的な原理・原則にかかわるさまざまな理論・モデルをもとに紹介されている。

看護学生は実習終了後、受けた指導に対して「あの一言でできるようになったと思う」「あの助言でわかった・考えた」と口にすることがある。しかし、教わったことが“学生の学び”という形になって行動変容するまでには時間が必要であり、教える人が「この指導でよかったんだ」とタイムリーに感じられる機会は多くないのかもしれない。そのため本書は、指導を振り返る際の助けになるのではないかと感じる。

また、13のケースは、新人看護師と看護学生では求められるものが違えど、「優先順位がうまくつけられない」「同じミスを何度も繰り返す」「患者さんからかわりを拒否された」など、臨床の指導者のみならず、

看護教員が実習指導の場で遭遇する場面が取り上げられている。教える人にとって困難なことや困っている（た）ことを解決するためには、教わる人のつまずきを理解することが求められる。それはつまり、教わる側が何に困っているのかも一緒に解決できることになる。実習指導者と看護教員と一緒に本書から学び、意見交換し、役割を分担するきっかけにもなりそうである。

教える入口に立った看護教員・看護師は、本書を通じていわゆる“教わる人の反応のあるある”を想定でき、指導の準備として活用できる。また、教える経験が続いている看護教員・看護師は“指導の振り返り”ができる。そしてその両者が、ともに指導を振り返りながら意見交換や指導方法の共有などの場面でも活用できる。原理・原則にかかわるさまざまな理論やモデルを確認し合い、教える人たちがチームとなり教わる人へかかわれるのではないだろうか。

著者の教育観にあるように、教育＝共育である。教えている側も教わっている。これが未来の仲間（学生）・後輩（同僚）を育てる者に必要な認識であると思う。長く看護教育の指導に携わってきた著者の、教える人・教わる人へのやさしさと激励、そして看護教育をいっしょに考えてくれているあたたかなまなざしが伝わる1冊である。